

60周年記念に寄せて



名誉会員 星野保郎

日本赤十字社診療放射線技師会創立60周年おめでとうございます。

私が足利赤十字病院に入職したのが丁度50年前1963年でした。現在赤十字病院に勤務している放射線技師の7割くらいの方はまだ生まれていなかったでしょう、当時の赤十字本社は木造2階建て建設時期は覚えていませんが現在残っていれば国の重要文化財に指定されるような重厚な建物でした。

1963年はアジアで初めてのオリンピックが開催されるため、数年前から東京に限らず日本中建築ラッシュで活気に溢れていました。東海道新幹線、東名高速道路、首都高速道路等、オリンピック開催に間に合うよう突貫工事で建設されていたことをよく覚えています。

私は入職と同時に赤十字社診療放射線技師会（当時はエックス線技師会）設立発起人である、上司の故瀬山吉久名誉会員に勧められ入会しましたが、当時の会員数は500人に満たなかったと思います。年一回の研修会は会設立時から脈々と引き継がれ、現在も活発に開催されている事は発起人の方々の喜びであり会員の恩返しでもあると思います。

現在の若い会員には死語となっていると思いますが、タングステン酸の増感紙、タンク現像の時代に入職し何年か後に希土類感材、自動現像機の出現に目を見張って放射線技師も暗室作業が半分以上になったと喜んでいましたが、1975年イギリスのレコードメーカーがコンピュータトモグラフィーを開発したとの発表に、医学会全体が吃驚しました。当時としては超高額機器の為、総合病院とは言え地方の足利日赤には当分入らない高根の花と試みておりましたが、医師からの要望が強く数年後には足利日赤にも導入され診療に革命を起こしました。この頃からエックス線写真にもデジタル化が進み、CR画像の目覚ましい進歩、デジタル化が遅れていた透視部門にもフラットパネルの開発により一気にデジタル化が進んだものと思います。記憶媒体の開発はパソコンでも分かりますが、10数年でメガバイトからギガ、テラバイトまで開発が進み医療関係も十分な恩恵を受けています。今では大病院から地方の診療所までモニター診断が主流となっていますが、モニターを前で画像を見ている放射線技師の姿を見ると、50年前の放射線技師と現在の放射線技師では撮影のスイッチを押す以外は別の職種と思うほどに変化しています。日毎に進歩している医療機器に遅れることなく診療に貢献している若い技師を目の前にすると隔世の感が除けません。

院内勉強会、地域勉強会、赤十字放射線技師研修会、赤十字医学会、等研修の場は充分にあると思います。今後益々進歩するであろう医療界で切磋琢磨し、病院における診療放射線技師の存在を益々高めて頂きたいと思います。

60周年記念号のお祝いの言葉とは成らず、老会員の思い出話になってしまいましたが、日本赤十字診療放射線技師会の益々の発展、及び会員諸氏の健勝を祈願しお祝いの言葉といたします。